

北マリアナ諸島からの引揚者
——八丈島民の移民事例を中心として

對馬秀子*

**Returning from the Northern Mariana Islands to Japan after World War II:
A Study on the Migration of the Hachijou Islanders**

TSUSHIMA Hideko*

The purpose of the paper is to clarify the process and the cause of emigration from the Hachijou Island to the Northern Mariana Islands in Micronesia under Japanese administration from 1914 to 1944.

Historical background of emigration is as follows: 1) Emigration of Hachijou people, mostly as sugar farmers, extended from Ogasawara, Daito Island, and to the Northern Mariana Islands. 2) Nanyo Shokusan Company started sugar manufacture in Saipan in 1917, and they recruited workers from Ogasawara, Hachijou Island. The first emigrant from Hachijou Island arrived in Saipan in 1917. 3) South Seas Development Company, sugar manufacture in Saipan, started recruiting workers mainly from Okinawa in 1922 and later from Hachijou Island after 1927. As the depression of early Showa Era affected industries in Hachijou Island then, there were people suffering from economic problems at that time. More than three thousand Hachijou Islanders were employed as sugarcane farmers, and more than five hundred of them returned home after world war II. 4) The support for the repatriates was limited to the minimum daily necessities. Consequently they depended most on their relatives in reconstructing their lives at home. 5) The emigrants who came home from "Nanyo-Gunto" before 1944 had to go through repatriation for the second time. They were obliged to be evacuated in 1944 just before Japan lost the war.

キーワード：北マリアナ諸島，引揚者，口述資料

keywords: The Northern Mariana Islands, Repatriate, Oral History

はじめに

八丈島からサイパン島への移民は1917年に始まり、1930年代にピークを迎え第二次世界大戦で幕を閉じた。戦渦を生き残った人々が故郷へ引揚げてきた。

* 東洋大学社会学研究科研究生；Graduate School of Sociology, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ deko@med.juntendo.ac.jp

本稿の目的は、旧委任統治領南洋群島¹⁾から八丈島引揚げまでの移民の動向を政治・経済問題に視点をおいて明らかにすることである。これまで、八丈島に関する研究の中では、移民に関する考究は十分に行われてこなかった。そのため、引揚者が戦中、そして戦後の故郷でどのような状況におかれていたのかを伝えるものも少ない。本研究で、引揚者の口述資料を中心に移民の状況を明らかにし、八丈島における南洋群島移民史の一端を考察する。

最初に本研究に関連する先行研究から八丈島の人口移動について要点と課題を整理する。八丈島に関する代表的な著作として大間知篤三による『八丈島』(1951)がある。これは、南洋群島への移民盛んなりし1938年とその後の1949年の民俗調査をもとにしたものである。大間知は近世からの人口問題を分析して、古来より天災地変の多い八丈島で過剰人口のはけ口を広く島外、特に南方への進出に求めたこと、伊豆諸島のうちでは八丈島だけが極めて旺盛な南方進出を示したことを指摘し、戦後の引揚者による急減な人口過剰が八丈島における新たなる人口問題を現出させたと述べている[大間知1951:35-46]。だが、戦後の引揚げ問題についてそれ以上の分析はなされていない。奥山育子は人文学の立場から、明治期を中心に昭和期の南洋群島までの人口流出過程を詳細に分析している。農業開拓移住を特徴とした家族移住が全島的に行われたとする。全家離村農家にみられる特徴について、農家を土地に緊縛してきたところの家に対する観念との関わりから検討している。本家と独立した形の隠居制を持ち母系親族、双系親族集団が重視される世代階層制村落²⁾では、同族階層制村落のような単系集団を生成する社会構造基盤・価値観が欠如していること、土地に対しても強固な固着性をもたらさなかったことが考えられると述べている[奥山1986:59]。筆者のこれまでの調査では、本家は長男子継承が貫かれており奥山が述べる家観念の希薄については検討を要する課題だと思われる。ともあれ、これまでのところ引揚者の戦後までを視野に入れた移民研究は行われていない。

本稿の研究は、文献資料と聞き取り調査による口述資料に依拠している。人の記憶を頼りとした口述資料について、1990年代に入って歴史を論じ考察するにあたって記憶を方法とする議論³⁾が盛んになり、記憶の概念が大きな影響力を持ち「戦争と記憶」は格好のテーマとして取り上げられたという[成田2006:3]。なぜ改めて人の記憶が議論されるのか。先の世界大

-
- 1) 南洋群島とは、1914年10月第一次世界大戦で日本海軍が占領した旧ドイツ領ミクロネシア(米領グアムを除く赤道以北のマリアナ諸島、マーシャル諸島、カロリン諸島)のことで、日本にとっては最小(島数623、総面積2,149km²)の熱帯植民地であった。日本の占領時代約30年余りを南洋群島と呼んだ。南洋群島の主産業であった製糖業は、北マリアナ諸島サイパン島、テニアン島、ロタ島と発展し、八丈島からの移民もサイパン島、テニアン島に多かった。本稿では特にこの3島のことを取り上げる。
 - 2) 世代階層制とは、社会人類学の蒲生正男、村武精一、坪井洋文等によって提唱された概念である[蒲生・村武・坪井編1975:196-282]。また、ここでいう母系親族、双系親族は、現代では母方および双方的というのが適当であると思われる。
 - 3) 歴史学の成田は、戦後の60年を体験/証言/記憶とし、1950年代を体験、1970年代を証言、1990年以後を記憶の時代と時期区分して分析している[成田2006:4]。

戦から60年以上の時が経ち戦争体験者の高齢化、戦争を知らない世代の増加によって戦争の記憶が失われつつある。人類学においても戦争や植民地経験、人類学者と植民地との関係についての議論が展開されるようになった。戦後長い間沈黙してきた戦争について戦争体験者自らが記録に留めようとする取り組みもある。このような流れに通底することは、「記憶という可塑的で、移ろいやすい媒介項をとおして思考することで、これまでの権力性、隠蔽性を検討しようということ」である〔足立2003:412〕。

本稿で八丈島民を取り上げる理由は、第一にサイパン島、テニアン島の移民のなかで沖縄に次いで人数が多かったが断片的な記録しか残されていないこと、沖縄などのように移民の記録化への積極的な取り組みはなく戦争や移民について語れる人が減少し記録も未整備なままであることに危惧を抱いたからである。

筆者による八丈島の調査は、1991年11月からであるが⁴⁾、「私は南洋で生まれた」という話に関心を持ち2002年頃から南洋群島移民に関する聞き取りを始め、2007年までに31人(男性24人、女性7人)から聞き取りを行った。インタビューは、1回だけの場合や4-5回の場合がある。すでに故人となった方が7名である。筆者はこれまでに彼らのライフ・ヒストリーの調査を通して、親から子、孫が小笠原、大東島、南洋群島へと世代を超えて移動していることを明らかにした〔對馬2005〕。また、八丈島の第一次産業について考察し、産業と移民、特にトビウオ漁の盛衰から南洋群島への移民の要因を探ろうと試みた〔對馬2006〕。この時点では、トビ漁の盛衰と移民の関係について明確な資料が得られなかった。

本稿では、引揚者の戦後までを視野におき八丈島の移民を植民地支配、経済問題の中に位置づけて考察を試みる。しかしながら、筆者が聞き取りした引揚者は80歳前後の方で、引揚げ当時の年齢が10代であり、父親が家庭を采配していた時代のことで移民に関する詳細なことは不明なことが多い。また、家族・親族への配慮から「ここは書かないで欲しい」といわれたこともある。一方、八丈島では戦時中に多数の行政記録を紛失⁵⁾しており文書資料、体験者の証言ともに自ずと制限がある。

筆者は、これまで八丈島民が開拓に携わった南北大東島へ2000年9月、小笠原(父島・母島)は2006年9月、サイパン島、テニアン島には2001年2月、ロタ島に2006年3月とそれぞれ農場跡と戦跡を訪ねた。その他、テニアン島の南洋群島戦没者慰霊祭には、2007年6月1日に参加し、引揚者の集まりであるサイパン会、テニアン会、南興会には2006年、2007年と参加した。

4) 八丈島の調査研究は、1990年頃に東洋大学白山人類学研究会で松本誠一教授を代表として八丈島研究会を立ち上げたことから始まり、以後短期の調査を続けている。

5) 1944年八丈島の住民は内地へ疎開させられたが、最後の疎開船「東光丸」が撃沈され、多数の犠牲者とともに積み込まれた行政記録も海の藻くずとなった。

I 南洋群島から日本人移民の引揚げまで

1 南洋群島の日本人移民と太平洋戦争

最初にサイパン島、テニアン島における日本人移民が引揚者となるまでの全体像から捉えたい。日本が第一次世界大戦で占領した頃のサイパン島、テニアン島は、それまでの支配国スペインやドイツ時代の影響でほとんど無人島に近かった。これらの島に日本人が急増した背景には、1921年に南洋興発株式会社（以後南洋興発とする）⁶⁾が設立され製糖業を開始したことと関係する。占領当初には日本人の人口はわずか数十名であったが、1920年第一回の島勢調査では3,671人（現地住民48,505人：チャモロ族2,824人、カナカ族45,681人）⁷⁾となり、1943年には96,670人（現地住民は52,197人）に膨れ上がっていた〔南洋廳長官々房1932: 7-16; 今泉1993: 76〕。その人口の半数以上が沖縄県人であった。1944年の南洋興発関係の「抱擁人口」（傍系企業を含めた社員、現業員、耕作者、準耕作者、作業員と、それらの家族を合わせた推定人員を意味する）は、48,000人であった〔武村1984: 111〕⁸⁾。実に南洋群島人口の半数以上を南洋興発の関係者が占めていた。島別の日本人は、サイパン島に最も多く、テニアン島、ロタ島と続き、職業は農業、水産業、商業の順に多い。

八丈島民の職業は、主として南洋興発の蔗作人、南洋興発の工場労働者、南洋興発の関連会社、野菜や綿花等の自作農業、商店経営等々である。南洋興発の蔗作人名簿によると12-3%⁹⁾が八丈島からであった。

この平和な島の生活が脅かされるのは、1944年6月11日米軍の攻撃からである。戦況を知らされていなかった民間人にとっては突然の出来事であった。ある日突然、海が見えないほど真っ黒に艦船が並んでいたという。サイパン島は6月15日に米軍が上陸し7月7日に陥落、

6) 南洋興発株式会社に関しては、松江(1932)、能中(1941)、野間口(1996)、労働者の立場からは野村(1987)があり、それぞれの立場から違った現実が見える。植民政策と製糖業に関しては、飯高(1999)、安部(1985a; 1985b)などを参照されたい。

7) 占領当時の南洋群島には、チャモロ族とカナカ族が居住していた。両者は、ミクロネシア民族と総称され容貌風俗習慣等について著しい相違があったという〔大蔵省管理局1985: 38〕。チャムロ族（この資料では、チャムロになっている）は、マリアナ群島を主として西カロリン群島のパラオ、ヤップ島に居住し他には集団居住せず、マリアナ群島のチャムロ族は西班牙人、フィリピンのタガレン族等との雑婚により著しく変異したといわれている〔大蔵省管理局1985: 39-40〕。一方のカナカ族は、布哇及太平洋諸島に居住する民族の総称で、南洋群島原住民の大部分は、本種族に属するが、インドネシア、ポリネシア及メラネシアとの混血に依り非定型となれるものが多い、とされている〔大蔵省管理局1985: 40〕。また、両者の人口の差については、チャムロ族は、彼等相互間の闘争及屢次の叛乱に依り西班牙に依る虐殺等の為に人口激減したといわれている〔大蔵省管理局1985: 40〕。本稿では、現地住民とする。

8) 著者の武村次郎は南洋興発の社員であり、引揚げ後は閉鎖機関指定解除後の南洋興発の精算実務に携わった人物である。

9) この数字は1932年南洋興発発行『興発記念—砂糖になるまで』の蔗作人名簿による。

続いて7月24日テニアン島に米軍が上陸し8月3日に陥落した。このわずか1-2ヶ月に多くの命が奪われた。

戦況の悪化した1943年9月30日の御前会議で、内南洋（南洋群島の別称）が「絶対国防圏」の圏内に含まれ、同年12月に青壮年男子を除く老幼女子の本土引揚げ命令が出された〔吉田 2007: 128-142〕。南洋群島全域から戦前の引揚者は16,197人、引揚げ戦の撃沈で約1,700人が水没した〔今泉 2004: 4〕。

最終的にこの戦闘による死者は、サイパン島で12,000人、現地住民約600人、テニアン島では約4,000人、朝鮮人約50人、米軍の上陸がなかったロタ島では約100人¹⁰⁾となっている〔厚生省援護局 1977: 311-321; サイパン会誌編集委員会 1986: 27〕。何ととってもサイパン島、テニアン島は、この戦闘で追い詰められた多くの民間人が自ら命を絶った場である。米軍占領後の自殺数は、約1,000名、あるいは200名とも報告されている〔Embree 1945: 7〕¹¹⁾。

2 引揚げまでのキャンプ生活

戦渦の中を生き残った民間人は、サイパン島はススツペに、テニアン島はチューロに設置されたキャンプで本土引揚げまでの一年半ほどを暮した。ロタ島は、米軍の上陸もなく人口も少なかったために島全体が収容施設だった。1週間くらいで捕らわれた人もいれば2ヶ月近くジャングルをさまよった人もいる。ほとんどの民間人は、収容された時には極度の栄養失調と蛆や虱で最悪の衛生状態であった。体力のなかった子どもや高齢者はキャンプに入ってから亡くなる場合も多かった。米軍は、収容されてくる民間人の衛生に特に神経を使ったといわれている。米軍が頭から振りまいたという DDT に関して「シラミがスーッと死んでいったのが気持ちよかった」ともいう（A氏¹²⁾談）。

サイパン島では、チャランカノアに現地住民、朝鮮人、日本人が別々に収容された〔Embree 1945: 7〕。チャモロ族はサイパン島に移動させられたので、テニアン島のチューロキャンプには、日本人と朝鮮人だけが収容されていた〔Embree 1945: 25〕。日本人キャンプの警護は、現地住民の仕事であった。日本の敗北は現地住民と朝鮮人にとっては植民地からの解放であり、日本人は管理される立場へと逆転したのである。

10) 引揚げや戦没者の統計数字は、資料によって異なることが多く正確な数字は不明である。特に民間人について、安仁屋政昭が「沖縄戦の記録」で政府の責任による一般県民戦没者の全数調査は、全くなされていないと述べている〔安仁屋 1988: 66〕。

11) Embree, John は、1945年8月8-22日の2週間両キャンプに滞在して日本人の調査をしていた。このレポートはその報告書である。調査の基本的な目的は戦後の沖縄占領政策への資料となることを示唆している。どのように利用されたのかは不明であるが、当時沖縄の帰属をめぐってさまざまに論議されていた。人類学者と植民地の関係を問う貴重な資料の1つであろう。このレポートの入手は中生勝美教授のご厚意によるものであり、ここに深謝致します。

12) 本稿におけるイニシャルは本名とは無関係であり、名前はすべて仮名とする。

表1. サイパン島, テニアン島キャンプの人数 (1945年8月)

	サイパン島キャンプススツペ				テニアン島キャンプチューロ			
	成人男子	成人女子	16歳以下	合計	成人男子	成人女子	16歳以下	合計
日本人	3,822	3,644	6,040	13,506	2,764	2,126	4,200	9,090
朝鮮人	576	286	524	1,386	905	451	985	2,341
中国人	0	0	0	0	1	2	1	4
チャモロ	728	756	1,176	2,660	0	0	0	0
カナカ	291	251	296	838	0	0	0	0
合計	5,417	4,937	8,036	18,390	3,670	2,579	5,186	11,435

出典: Embree 1945: 7(サイパン), 25(テニアン) より作成

表1は1945年8月時点の民間人収容人数である。約半数が16歳以下の子どもであり、朝鮮人の男女差の大きいことが指摘できる。サイパン島では人口の約6割が、テニアン島では約7割の民間人が収容された。バラ線に囲まれたキャンプ内には学校や娯楽施設も整い仕事もあり普通の暮しがあったという。だがここにも、日本の敗戦をめぐって勝ち組・負け組の争いがあり、両島のキャンプで1名づつの殺害事件¹³⁾があった。この中の約500人¹⁴⁾が八丈島に引揚げてきたと思われる。

3 引揚げに対する行政の対応

敗戦時に海外にいた日本人は、厚生省の統計では旧陸海軍・軍人軍属、民間人を含めてその数約660万人¹⁵⁾とされている。これらの人々が、戦後処理として日本本土へ強制送還となった。『マッカーサーレポート』¹⁶⁾によると海外邦人の早期引揚げは、人道的および日本の占領下から解放された国々の経済的負担を緩和する上でも、マッカーサーにとって主要な問題となっていた。海外在留邦人の引揚げは、4期に分けて行われたが、戦前日本が占領していた国々は地域によってソ連、中国、英国、米国の支配下におかれ、支配国によって引揚げの事情は全く異なった。サイパン島、テニアン島は、米国の支配下におかれたために第一期1945年9月14日—1946年2月に行われた〔GHQ参謀第2部1998:149〕。南洋群島全体の民間人引揚げ数は、27,506人¹⁷⁾とされている。

13) キャンプ内の殺害事件については、野村(2005)に詳述されている。

14) この数字は、「戦災者(引揚民)援護状況調」によるが、この数字には内地の引揚者も含まれている。敗戦前の引揚げもあるので正確な引揚げ数は不明である。

15) 行政の記録では、敗戦時の国外在留邦人の数は、上陸時に引揚げ手続きを行ったものみの統計で約660万人である。しかし、戦争末期から敗戦直後には、密航での帰国など引揚げ手続きをしなかった者もあることや、内地、外地ともに各種統計が正確に把握されていなかったこともあり不確かであることなどから、少なくとも700万人、そのうち一般邦人は350万を中心に前後2-30万というところが、およそのめどといえようとする〔若槻1995:46-47〕。引揚げ問題については若槻を参照されたい。

16) 『マッカーサーノート』はVolume I, IIが4分冊され、Volume Iが第1巻、Volume I Supplementが第2巻、Volume II, Part I, IIが第3と第4巻にまとめられている。

引揚げの援護業務は、連合軍司令部（GHQ）の管理のもと厚生省が担当した。海外からの軍人・軍属の復員は1945年9月2日ポツダム宣言第九項の条項「指令第一号（陸海軍の武装解除，降伏等に関する一般命令）」（資料27）により外地を退去する事になった〔厚生省援護局1977:80〕。ところが民間人に対しては8月14日「居留民はできるかぎり現地に定着せしめる方針をとるとともに，現地での居留民の生命，財産の保護については，万全の措置を講ずるよう具体的施策を指示した」。しかし，10月25日GHQの指令により日本政府の外交機能が全面的に停止された事によって，外地の民間人は各地域の連合軍及び当該国官憲の強制命令又は終戦に伴って発生した現地の混乱によって生活手段を喪失し，残留することがきわめて危険，不安な状態になったために引揚げが決定された〔厚生省援護局1977:80〕。この対応のおくれは「日本国の主権は，本州，北海道，九州及び四国ならびに吾等の決定する諸小島に局限せらるべし」というポツダム宣言第八項の規定以外に日本への引揚げを規定する包括的命令はなかったためという〔厚生省援護局1977:80〕。引揚者の保護・救済をするために厚生省の行政機構が整備され，引揚港として浦賀（横須賀），舞鶴，呉，下関，博多，佐世保，鹿児島，横浜，仙崎（下関），門司（博多）が指定された。八丈島民の引揚げ船は，浦賀と横浜の港に到着した。

II 八丈島における南洋群島移民と引揚げまで

1 南洋群島への移民

本節では，八丈島からサイパン島，テニアン島までの移民のプッシュとプルの要因について検討する。サイパン島へは，1917年大賀郷村の浅沼傳之助氏が単身で，翌年1月樫立村の大澤徳右衛門氏外13-4家族が移住したことから始まった〔永久保1973:102〕。1917年は，南洋群島では南洋殖産株式会社が製糖業を始めるにあたり小笠原（八丈島）から80戸の小作を入植させた時である〔今野・藤崎編1996:33-36〕。小笠原からサイパン島への渡島は1914年であり八丈島より3年早い〔小笠原村教育委員会中学校社会科副読本編集委員会編1988:98〕。幕末期，小笠原の領有権獲得のために八丈島から移民が募集されたこともあり，明治後期の小笠原は八丈島民が半数を占めていたという〔永久保1973:101〕。初期の移民がこの移民募集と関係するのかどうかは不明であるが，時期が重なる。2番目に渡島した大澤徳右衛門の親戚は10年後の1928年にサイパン島に渡っている。

こうして1930年代になると南洋群島への移民が急増していく。この背景には，1927年頃の南洋群島と八丈島の事情が重なる。同年南洋興発はテニアン島でも製糖業を開始したが，沖縄

17) この数字は，上陸地において引揚げ手続きを行った者のみとある〔厚生省援護局1977:689-690〕。

県人の労働争議¹⁸⁾が発生し沖縄以外から移民募集を始めた時期であり、昭和の恐慌といわれた不況が日本を襲い、八丈島民の生活にも大打撃を与えていた [伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会 1981: 330]。1935年の人口統計に、本籍人口と在島数、および出寄留数と入寄留数¹⁹⁾が記録されている。本籍人口が14,092人、在島数9,646人とあり、4,446人の差がある。同時に、1930-35年の平均出入寄留者数の出寄留者6,134人、入寄留者1,084人とある [永久保 1973: 6]。つまり、平均人口9,000人といわれる島で、本籍を八丈島に残して4-5,000人の人が島外にいたことになる。1938年2月13日付の「南海タイムス」²⁰⁾には「南洋群島には東京府の人達は約五千人から働いてゐる、その内でサイパン島に約三千人、その三千人の大多数は八丈島、小笠原の人達が占めてゐる」とある。1932年南洋興発発行の蔗作人名簿で、八丈島出身がサイパン島には108戸、テニアン島は66戸²¹⁾であった。当時の徴兵検査で南洋への移民が奨励されたことや「畑が5-6町歩もらえる」上に、渡航費や当座の生活費を南洋興発が立て替えたことが移民の契機に繋がったと思われる。

以上のようなプッシュとプルの要因の時期が重なり移民を促進させた。南洋群島への移民を約3,000人としても人口の約3割が南洋群島と関わったと考えられる。戦没者数は軍属として記録されただけでも433人である(表2参照)。

表2 軍属戦没者の島別、地域別人数

八丈島の村 ／南洋群島	三根村	大賀郷村	檜立村	中之郷村	末吉村	合計
サイパン島	80(8)	103(1)	79	36	30(5)	328(14)
テニアン島	2	12	16	65(12)	10(1)	105(13)
合計	82(8)	115(1)	95	101(12)	40(6)	433(27)

出典：山田 1995: 188-211より作成、()内の数字は、自決者の人数。
但し、この数字は軍属のみの数字で、軍属扱いされなかった12歳以下と61歳以上については含まれていないとある。

2 戦中・戦後の引揚げ問題

人口流出が続いていた八丈島に戦況の悪化によって外地から引揚者が戻ってきた頃、八丈島にも内地疎開への通達が出された。サイパン島、テニアン島が陥落し本土攻撃の基地にされた

18) これは、沖縄県人に対する賃金差別や収穫物の目方の誤魔化しがあったという(B氏談)。

19) 寄留とは、「九十日以上本籍外ニ於テ一定ノ場所ニ住所又ハ居所ヲ有スル」事で、大正三年(法27号)に寄留法が制定された [中川 1941: 100]。

20) 南海タイムスは、1931年創業の八丈島で発行された新聞である。

21) この数字は、サイパン島からの引揚げの人に確認してもらって計算したものである。

ことで、距離的に近い小笠原、伊豆諸島は住民の安全確保と戦闘開始に備えて子どもと老人、女性に対して内地疎開の通達が出された。通達は、小笠原諸島には1944年6月26日、大東島は7月に²²⁾、八丈島は9月末であった。この内地疎開は、八丈島民の島への執着心から遅々としてはかどらず都から事務官など関係者が説得してようやく3,697名の引揚げをみたが、なお残留家族1,800名が応じなかったとされている〔伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会1981: 340-343〕。とはいえ、内地への疎開も安全ではなく1944年4月16日疎開船東光丸が島を出た直後に撃沈され多数の命が奪われた。こうして敗戦間際の八丈島は、住民の数が激減した。内地への疎開は、八丈島民の身の安全と同時に、八丈島にいた約20,000人の軍人のために人口過剰、食糧問題などもあったとされている。縁故疎開、学童疎開、無縁故の場合は軽井沢、奥多摩、板橋などと各地に散らばっている。村民の疎開先であった軽井沢の場合は地獄のようであった、と今でも語り継がれている（C氏談）。

これらの結果、敗戦直後の八丈島に、外地と内地からの引揚者が次々と帰ってきた。戦後の八丈島で特筆すべきは、沖縄²³⁾、小笠原、奄美などと同様に戦後処理という国際政治のなかで伊豆諸島も信託統治領として指定されていたことである。2ヶ月という短期間であったためにそれほど知られていないが、伊豆諸島はGHQから「日本の範囲から除かれる地域」とされた〔伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会1981: 340-347〕。「南海タイムス」1946年4月3日付に、1946年1月29日以降特定外周領域の指定を受け日本政府による行政の停止を命ぜられ、同年3月22日解除された。この結果、小笠原や大東島出身で八丈島に親戚のある人は、その親戚を頼って八丈島に引揚げてきた。

こうして敗戦直後の八丈島の人口は、約13,000人（青ヶ島、小島を含む）と急増した。引揚げ数6,059名とある〔伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会1981: 340-347〕。敗戦直後の状況は、戦前に駐屯していた軍隊によって役場や病院まで破壊されていたことと急激な人口増加によって食糧不足や耕作地不足などで八丈島民の生活は圧迫されていた。樫立村では村民の大半が疎開して不在だったため、軍隊が農家の生命ともいべき蚕具類まで引っ張り出して薪の代用にするなど、軍隊が引揚げた後で、村の産業復興は用具なしでどうしようもなく、そのうえ戦後軍隊が引揚げてしまい返済の要求もできなかった、という〔伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会1981: 348〕。

このような中で、どのような援護事業が行われたのであろうか。

3 引揚者に対する援護事業

八丈島の引揚者に対する援護事業についての記録は少ないが、中之郷地区の「戦災者（引揚

22) 大東島に関しては、城間編2001: 107-113による。

23) 沖縄の戦後に関しては、浅野2007: 298-344を参照されたい。

民) 援護状況調」(八丈島民俗資料館所蔵)があり、「引揚世帯一覧, 1948年4月5日: 110世帯, 497名」, 「寝具配給簿: 陸軍毛布」, 「援護物資被服・寝具配給表: 被災者, 復員者, 要援護者(1946年12月)」, 「援護物資配給表: 兵食器(大)(中)(小)」, 「戦災者に対する金属製厨房用品及縫針配給に関する件」「引揚民世帯家族数調, 海軍からの払下品: 衣料, 南洋より72世帯286人, 内地より25世帯50人」, 「引揚者用(有償)物資配給, 第二次應急家財(無償)特別配給(1947年3月18日付)」がまとめられていた。毛布から鍋, 茶碗に至るまで細かく名前と数量が記載されているが, 金銭の支援に関するものは見あたらなかった。

援護事業に関する聞き取りは, 体験者が子どもだったということもあり不十分である。そこで, 「南海タイムス」に依拠しながら引揚者の戦後の状況を見る。1948年頃までは, 引揚者に関する記事は多い。それらを抜粋すると, 生活の窮状を訴えるものが多いが, 1) 援助物資に関するもの, 2) 引揚者の共助会の結成に関するものがある。以下の日付はすべて「南海タイムス」による。

1) 援助物資に関するもの: 生活困窮者に対する援助物資に関しては, 保存資料にあるように生活必需品の数々が多い。1946年1月23日付では, 戦災援護會の分会が支庁内に設置され, 見舞金, 身廻補給金, 生活扶助費などの支給, 生活物資としては布団や蚊帳, 靴下の類が支給された。有償の場合, 毛布は一枚184円65銭とある。1947年2月2日付には, 住宅建築資金として坪2,500円宛, 一戸当り25,000円とあり, 引揚者が2-3年で小さい小屋のような家を建てて独立していった(D氏談), という時期と重なる。

2) 引揚者の共助会の結成に関するもの: 1946年10月に代表600人が集まって引揚者の共助会が結成された。社会党の渋谷代議士が来島した折に引揚者の生活権確立を要求して全島的に団結を呼びかけ, 1. 生活の確保, 2. 開拓帰農の促進, 3. 就業対策の整備, 4. 配給物資を要求したとある(1946年10月23日付)。その後, 各村毎に引揚者共助会が結成されていった。1947年2月3日付には, 資金300万円として八丈島開拓組合も結成され, 漁業, 畜産, 木炭などの事業開始という記事もある。村が買収して引揚者に無償で提供して開拓させた水海山という地域も末吉にできた。ここからは, 内地より南洋からの引揚者が多いことや少なくとも600人以上の引揚者がいたことになる。

一方, 本籍地に戻れなかった大東島, 小笠原の引揚者に対して1946年1月23日付, 両島の引揚者200戸を縁故関係者は引き受けるように議会決定した。1947年10月3日付で, 八丈島に引揚げてきていた大東島出身5世帯14名が故郷大東島へ再復帰したとある。これらの記事は断片的ではあるが敗戦前後の八丈島の状況がつかめる。次に, 以上の状況を引揚者の事例から検討したい。

III 引揚者の事例分析

1 引揚者の事例

本節では、戦前の引揚げと戦後の引揚げに時期区分して検討する。

1-1 戦前の引揚げ

事例 1（大正 13 生女性）は、1928 年の興発²⁴⁾の募集で家族 5 人（祖父、両親、子 2 人）でテニアン島にきた。ソンソンにある第一農場で 6 町歩の畑を祖父、父と人夫（沖縄の人）を雇って農作業をした。父の兄がサイパン島に居たので家が建つまで世話になった。数年後、母の姉夫婦もテニアン島にやってきた。父が南洋から土地の税金を八丈島に納めていたのを覚えている。1940 年に八丈島に引揚げてきた。引揚げ後、人に貸してあった土地を明渡してもらうために家屋を移動してもらった。家屋は売却してあった。新しい家は、いい材料を調達して建てたので立派だと近所の評判だった。

1944 年 3 月内地への疎開の通達で奥多摩へ行く事になった。奥多摩は、その時家に住んでいた兵隊が紹介状を書いて自分の家を紹介してくれたので親切にしてもらった。父は軍属として八丈島に残った。1945 年 10 月再び八丈島に引揚げてきた。結婚後は、黄八丈で家計を支えてきた。

事例 2（大正 9 生男性）は、1927 年の興発の募集で、親子でテニアン島に行った。区画整理された 6 町歩の畑をくじ引きで決められた。人夫（沖縄の人）が二人家にいた。興発の指導員による農作業の指導は厳しかった。畑仕事は忙しくて遊んだ記憶がない。1940 年の徴兵検査を期に引揚げてきた。父親が 53 歳と興発の小作の定年の 50 歳を過ぎていたこともあり、興発に家、畑を返納して当時のお金で 6,000 円ほどで買い取ってもらった。引揚げ後は大賀郷村で百姓をした後、叔父の紹介で会社勤めをした。家と土地は中之郷村に 450 円で購入したが仕事の都合で大賀郷村に 30 年住んだ後、中之郷村の家に戻ってきた。

事例 3（大正 8 年生女性）は、1928 年の募集で、両親と子ども、祖父と叔父夫婦でテニアン島に行った。自分の家族で 6 町歩の畑をもらい、叔父と祖父は 2 軒分として同じ敷地に 12 町歩もらった。八丈島の屋敷と畑は親戚に預けていった。学校卒業後、興発の主任の家でしばらくお手伝いをしていた。サイパン島にいた八丈島の人と結婚して夫婦で 1 町歩の小作をした後で、それを止めて夫の両親と同居、夫の病気を期に 1940 年に引揚げてきた。南洋群島から

24) 八丈島の方は、南洋興発のことを「興発」と呼ぶ。

引揚げ後、長野に疎開した。南洋では大勢の親戚がいて生活は大変だった。

1-2 戦後の引揚げ

事例4 (昭和4年生, 男性) の家族は, 大東島で砂糖きびを栽培していたが, テニアン島にいる伯父からこちらへ来ないかと誘いの手紙があり, 大東島の家を処分してテニアン島に渡った。母親の兄弟夫婦3組がテニアン島にいた。大東島で一緒にキビを絞っていた親戚の伯母は先にテニアン島に渡っていた。土地をもらうまでは親戚の家で世話になり, 興発から6-7町歩の畑をもらって家を建て独立した。1944年4月にサイパン島の実業学校に入学し親戚の家に厄介になった。6月10日疎開の話があり学校は2ヶ月ほどしか行っていない。その疎開船は6月11日に撃沈され仲間が亡くなった。学校には兵隊が居て戻れずテニアン島の実家に戻る。家の近くの洞窟が60発ほど爆撃を受け, 軍の命令で逃げろと言われ親戚と一緒にカロリナス(地名)の方へ逃げた。8月頃(期日が定かではない)に道路に立っていて収容され, 1946年5月最後の引揚げ船でサイパン島に寄り, そこで引揚者全員を乗せて浦賀へ着いた。日本兵の宿舎に1ヶ月滞在したあと八丈島に引揚げてきた。アメリカ兵のシャツ, ズボン, 毛布, 敷布をもらってきた。彼の親戚では, 某家族がライオン岩から飛び込み子ども一人が生き残った。八丈島の財産は処分してあったが, 祖母が家を建てるために残していた土地が2箇所あった。親戚の家に世話になりながら15-6歳で日を取り(日雇い)して稼いだ。親戚に頼んであった仕事が決まったのを期に隣村へ引越した。国債をもらったがわずかな金額で覚えていない。

事例5 (昭和7年生, 男性) は, 1934年2歳のとき両親と3人でロタ島にわたった。父は1944年3月赤紙が来て召集, 2ヶ月間東京で陸軍に入った後は, 在郷軍人としてロタ島の家から通いながら軍の仕事をしていた。1945年2月28日飛行場にいる父に会いに行き, 座って話しているところを機関銃で隣の父がやられた。ロタ島からは1946年2月6日のフィリピン周りの引揚げ船で15日ほどかかって横浜に到着し3月7日に八丈島に戻った。引揚げ船からは, 持って行きたいと言われ新品の毛布を30枚もらった(小学生の彼は, 日本兵から米一俵担いで帰れるならやると言われ担いで帰ったというエピソードを持つ)。毛布は一枚1万円ほど, あるいは米一俵と交換ができ, 軍服は米一俵になった。ロタ島へ出発する時に, 家と財産を処分して立派な墓を建てていった。引揚げ後は遠戚の家に間借りして畑も借りた。その大きな家には引揚者が5-6家族住んでいた。畑120坪に野菜を作った。家と畑の借り賃は, 一年分2人手間, つまり2日間大家の仕事ですればよかった。当時野菜はとても儲かった。戦後は農業からタクシーの運転手などあらゆる仕事をやったが, ロタ島での経験はすべて役に立っている。

事例6 (昭和3年生, 男性) は, 1928年母のお腹にいる時にサイパン島にやってきた。母

のイトコは、1918年八丈島から2番目にサイパン島に渡航した家族である。この伯父は、鳥島、小笠原でも働いたことがある。5年後には父の兄（長男）がサイパン島にやってきた。長兄家族は財産を処分してサイパン島へ渡ってきた。家はチャランカノアにある西村殖産（倒産した会社）の工場跡地にあり8町歩の畑を人夫（沖縄の人）を雇い砂糖キビ栽培を10年間やった。その後ガラパンのオレイにあって親戚の土地を借りて移動し3町歩の畑に野菜を作っていた。母方祖父母はマタンシャ（地名）で現地住民から畑を借りて綿を作っていた。1943年末南洋興発の社宅に住み引揚船を待っている間に戦禍に巻き込まれた。米軍が社宅の近くに上陸したので家族で約3週間逃避行の後、姉から「〇〇君は、生きるように」と言われ、皆と別れ一人で山中を移動した後、偶然再び再会した兄と南洋興発社員一行53人で投降した。

一年半のキャンプ生活の後、1946年1月早々（正確な日付は不明）浦賀に着いた。引揚船からは、日本人用のお菓子の入った大箱（中には弁当箱のようなケースが44個入っていた）3箱と毛布1枚、オーバーをもらった。これらは食料と交換できる。八丈島行きの船を待つ間の行員寮で、引揚げ時にキャンプで買ってきた新品の運動靴が無くなった。浦賀港に引揚げてきた時に南洋興発から10円の見舞金をもらい、それが戦後の出発であった。しかし、都内の親戚へ行くのに電車賃が3円もかかった。八丈島へ引揚げ、親戚の家に約2年間世話になった後、家庭の事情で東京へ出る決心をし、芝浦製糖で定年まで勤めた。島では、漁船に乗ったり農業を手伝ったりしていたが、お金はもらった記憶はない。その時の経験は後々の生活の全てにおいて役立っている。芝浦製糖とは、引揚者の大半を占めていた南洋興発の関係者がGHQに申請し1949年3月南洋興発の社長であった栗林徒一を立てて設立した会社である。

彼は収容所で、逃避行の途中で別れた家族の最後の様子をE氏から聞いた。彼と別れた後、姉は幼い子を抱えて最初に海に入り、姉の後から親戚家族は嫌がる子どもを連れて入水したという。彼らは入水の前に、彼らの最後を別れた家族に伝えてくれとE氏に頼んだという。結局、家族14人のうち八丈島へ引揚げたのは3人であった。残された彼は、毎年現地への慰霊を続けている。

2 事例のまとめ

【戦前の引揚げ】

戦局が悪化する前に引揚げてきた事例では、財産を持って帰ることができ移民としては成功したといえる。だが、1944年に行われた内地への疎開も経験することになり、外地と内地と短時間に同一人物が二度の引揚げを経験することになった。引揚げは、一度とは限らなかった。

【戦後の引揚げ】

戦後の引揚者は、サイパン島、テニアン島に米軍が上陸して戦闘が行われたために、戦場の

体験、キャンプ生活、無一物となって故郷に引揚げてきた。引揚げ後の生活は、移住に際して土地や家の管理を親戚に頼んで行った場合と財産を処分して行った場合では異なるが、生活の拠点を移住先に移していたために引揚者として無一物から生活を立て直して行った。しかし、なんと言っても戦渦に巻き込まれ、死屍累々とした中を逃避行の末に餓死寸前で収容されるという体験をしたという点では、戦前の引揚げと全く異なるといえる。

この事例では、女性の引揚者が少ないのであるが、女性の場合は家事と畑仕事の重労働で生活は大変だったといわれる。天水生活のなか、家族10人程の炊事は1回に炊く米も2-3升くらいであったというから家事は重労働であった。

戦前、戦後にかかわらずサイパン島、テニアン島が戦場とされたことで、ほとんどの引揚者が家族や親戚を爆撃で、あるいは自決によって亡くしている。そのため、戦後の生活の中で遺骨収集、慰霊が重要な位置を占めていた。

IV 考察

1 引揚者と親戚関係

引揚者からみた親戚関係は、移民や引揚げの際に先ず頼りとしたのは親戚でありその関係は強く、父方、母方の区別なく双方向的であることが指摘できる。移民の系譜をみても、きょうだいがオジオバがというように双方の親戚関係が芽づる式に連なっていく。移住先決定には親戚の影響が大きいが、八丈島民の場合、家族成員がそれぞれにサイパン島、テニアン島、小笠原諸島（父島、母島、硫黄島）、大東島、ロタ島、ポナペ島、パラオ島、グアム島、北海道、台湾、満州、朝鮮、ハワイ、ブラジル等々とその移住範囲は広い。南洋群島への移住は、親戚関係はもとより、移民に要する諸経費の立て替えや5、6町歩の小作になれるという南洋興発の募集があったことや同じ「島」であるという安心感と暖かいという気候条件も大きく作用したようである。

また、事例では結婚相手を同じ八丈島出身から選んでいるが、同郷で親戚関係を結び、経済的基盤の強化・拡大を計ったとも考えられる。大間知篤三は、八丈島の結婚を足入れ婚と、その後の長期の妻問い²⁵⁾について隠居の関係から分析し、妻問いは父息二代婚舎を分かつという家生活上の原則の実行であった、という[大間知 1951: 170-177]。南方での移民事例では、妻問いの例はなかったが、結婚後は親と畑も所帯も別にして異世代の同居は避けたようである。

親戚関係のあり方は、事例5の店賃を負担のないテーマで払うというように無償という一方的な行為ではなく、長期間でのお互い様、つまり一般的互酬性があると考えられる。その一方で

25) この慣行は1960年代まではみられる。生涯を八丈島で暮らしているN氏(80歳代女性)は、7年間の妻問い婚の後、姑の隠居で夫の家に引き移ったという。

は、引揚げ後に身を寄せた親戚から“引揚者”として物が無くなる度に疑われたことで親戚を転々としたという例もあるが、移民に際して親戚は頼り頼られる存在として重要であったといえる。

2 引揚者の経済的側面

引揚者の事例からは、政府の援護支援が経済生活の再構築にどの程度役立ったのかは定かではない。引揚げ直後は、日雇い、漁業、炭焼き、畑仕事など血縁、地縁を頼りに家や仕事を建て活路を開いていったといえる。しかしながら、戦争被害と人口過剰で八丈島全体の生活が逼迫していたこともあり、ただ温かく受け入れられたわけではなかった。時間の経過とともに引揚者に対する援護支援も整備される一方で、1950年頃には林業（炭焼き）、漁業（トビウオ漁やテングサ）も最盛期を迎えた。だが、離島の生活で死活問題となるのは、暴風などの自然条件による作物への被害や汽船運賃の値上げによる諸物価への影響である。「南海タイムス」1948年9月23日付には、運賃の値上げで産物の輸送費が高騰し、島再建の努力が水泡に帰すと窮状を訴えている。戦後の混乱した時期ではあったが、地理的、政治的条件から農林・水産漁に恵まれた反面、離島ゆえの困窮もあった。

引揚げ時に10代だった若者は、農業だけではなく郵便局や支庁、電力会社、建設業等々の企業など、縁故関係を利用して仕事を見つけ都市へ出て行った。親戚の支援を得て大学へ進学し教師になった人もいる。サイパン島、テニアン島には実業学校や高等女学校など教育制度が整っており教育水準は高く就職の時に有利だったと考えられる。南洋興発は財閥解体ですべての在外資産を失ったが〔増田・細谷編2000:151〕、芝浦製糖を設立し元社員を救済している。

女性の場合は、引揚げ後に結婚によって生活が変化することもあるが、近世から女性の仕事として重視されていた黄八丈を織ることで稼ぐことができた。こうして高度経済成長期を向かえ急増した人口は、都心へと流出していき人口減少が始まった。

3 移民と借金

最後に、移民を借金という点から検討したい。筆者の聞き取りで、100年以上前のことになると「祖父母の世代に借金の返済で小笠原へ稼ぎに行き5年で返済した」「山を買った借金のために大東島に行き、5-6年で稼いで戻ってきた」「他人の保証人で借金を抱え返済の為に小笠原に渡った」という例がある。返済は終えたと言われる一族に、その後南洋群島へと移動した人々がいる。

また、八丈島には「ハマトビウオが大漁続きの時、農民までが船を持ち中之郷村一ヶ村だけでも60隻ほど船があった」と語り継がれている。しかし、ある漁師曰く、「漁師でないもんが船頭から乗り子まで雇って上手くいくはずがない」上に、その後の不漁で大勢借金をかかえ

た時期があるという。当時の八丈島には房州（千葉県南部）の漁師が多く出稼ぎに来ていた。この点について「自大正十三年至昭和三年度八丈島各村漁業調査統計」の「大正一五年度と昭和三年度の漁船の消長」と「トビ漁時期の船数」の資料を比較すると、他の地域に比べ中之郷村はトビ船の台数が56隻から39隻へと17隻も減少している。ハマトビウオの漁獲数から見ると1920年の統計から漁獲数が増え1922-23年に3分の1ほどに減少した後低迷している[對馬 2006: 199]。「船の借金で南洋へ渡ったという話を聞いたことがある」という人もいる。借金による移民送出の裏付けとなるだろう。テニアン島には中之郷村出身者が多いが、1927年の南洋興発の募集によってテニアン島に渡島したという例が多い。このことは、表2の戦没者数の地域差からも窺えるのではないかと思われる。

その他にも、農業不況を乗り切るために借りた借金の例と一攫千金を夢見て乳牛の事業を始めたが牛の伝染病で負債を抱えた例がある。両者はともに当人達は逃亡し借金の保証人となった者が財産を差し押さえられ、1927年の移民募集で南洋群島へ渡ったという。後者の家族は、子ども一人を残しテニアン島の戦禍で“海ゆかば”を歌いながら手榴弾で自決した[石上 2001: 135-136]。

八丈島の農業概要をみると、時代の要請によって常に何らかの新規の事業に挑戦しており、大儲けしたという話は多く聞かすが、その背後にこのようなことがあっても不思議では無いと思われる。八丈島から南方方面への移民の動機の1つに借金もなっていたといえる。

おわりに

本稿は、サイパン島、テニアン島からの八丈島民の引揚者を通して移民から引揚げまでの動向を政治・経済問題を視点において明らかにし、南洋群島の移民について考察することであった。本研究において口述資料、文献資料ともに制限があったが南方方面への移民は、南洋群島までの航海の拠点であった小笠原から始まり小笠原には八丈島出身の開拓者が多数存在したという政治的問題、八丈島民が開拓に携わった小笠原、大東島、南洋群島の主産業は製糖業であったことから同じ業種間での移動であったこと、昭和初期の世界恐慌が周辺社会にも影響を及ぼしたこと、植民地占領という国際政治のなかで八丈島の経済状況も重なり南洋群島への移民が促進されたことなどが明確にできた。

八丈島という小さな社会の移民であるが、当時の経済情勢のなかで捉えると、その背景に砂糖相場の暴落というような世界経済の影響、植民地の開拓、あるいは乳業などの新規事業の導入という政治的な問題も見えてくる。

引揚者の口述資料は、戦争と移民、戦渦のなかで民間人の自死（自決）がどのように行われたのかを伝えるものであり、足立が述べる権力性・隠蔽性を検討するという点では有効な資料

になると考える。

最後に、奥山が指摘した家や土地に対する観念については、島という自然災害、地理的条件などを加味して検討する必要があると思われる。また、これまでのところ移民の送金によって家や土地を増やしたという例は聞かない。島という自然条件にシロアリによる被害など物理的な問題、借金の担保や投機の対象となる家や土地は不動産といえども保障されたものではないことなどが、土地への固着性に影響したとも考えられる。八丈島の人が口にする「島で一番」は、黄八丈の織り方、天草取りの巧さ、島中の漁場を熟知している等々個人の能力や技術であることが多く、一つの価値意識を表現していると思われる。

現在も文書資料、口述資料ともに調査は継続中であるが、本稿で南洋群島移民の戦中・戦後の状況の一端を明らかにすることが出来たと考える。

参 考 文 献

〔日本語〕

浅野豊美

- 2007 「南洋群島からの沖縄人引揚と再移住をめぐる戦前と戦後」『南洋群島と帝国・国際秩序』浅野豊美（編）、298-344 ページ、名古屋：中京大学社会科学研究所。

足立明

- 2003 「開発の記憶——序にかえて」『民族学研究』67(4): 412-423.

安仁屋政昭

- 1988 「沖縄戦を記録する」『事実の検証とオーラル・ヒストリー』歴史学研究会（編）、56-92 ページ、東京：青木書店。

安部惇

- 1985a 「日本の南進と軍政下の植民政策——南洋群島の領有と植民政策(1)」『愛媛経済論集』5(1): 71-97.

- 1985b 「南洋庁の設置と国策会社東洋拓殖の南進——南洋群島の領有と植民政策(2)」『愛媛経済論集』5(2): 27-64.

飯高伸五

- 1999 「日本統治下マリアナ諸島における製糖業の展開——南洋興発株式会社の沖縄県人労働移民の導入と現地社会の変容」『史學』69(1): 107-140.

石上正夫

- 2001 『大日本に見すてられた楽園——玉砕と原爆の島テニアン島』東京：桜井書店。

伊豆諸島東京移管百年史編さん委員会

- 1981 『伊豆諸島東京移管百年史上巻』330-349 ページ、東京：東京都島嶼町村会。

今泉裕美子

- 1993 「南洋群島委任統治政策の形成」『近代日本と植民地——4 統合と支配の論理』大江志乃夫・浅田喬二・三谷太一郎・他（編）、51-81 ページ、東京：岩波書店。

- 2004 「解題」『沖縄県史資料編 18 キャンプススッペ現代3 ——サイパン島における軍政府の作戦の写真記録（和訳編）サンフランシスコ軍政府海軍部局 3245 番編集』島袋盛世（訳），財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室（編），1-10 ページ，沖縄県：沖縄県教育委員会。

大蔵省管理局

- 1985 『日本人の海外活動に関する歴史的調査通巻第二十冊南洋群島第一分冊第一部総論』30-55 ページ，ソウル：高麗書林。

大間知篤三

- 1951 『八丈島——民俗と社会』東京：創元社。

小笠原村教育委員会 中学校社会科副読本編集委員会編著

- 1988(1985) 『ひらけゆく小笠原』東京：小笠原村教育委員会。

奥山育子

- 1986 「八丈島における人口流出過程とその特質——主に明治初期から第2次世界大戦まで」『地学雑誌』95(1)(874): 46-61.

蒲生正男・坪井洋文・村武精一

- 1975 『伊豆諸島——世代 祭祀 村落』東京：未来社。

厚生省援護局

- 1977 『引揚げと援護三十年の歩み』東京：ぎょうせい。

今野敏彦・藤崎康夫編・著

- 1996 『移民史 [II] アジア・オセアニア編』東京：新泉社。

サイパン会誌編集委員会

- 1986 『サイパン会誌第2号——心の故郷』沖縄：サイパン会。

城間雨邨（編）

- 2001 『南大東島開拓百周年記念誌』沖縄：南大東村役場。

武村次郎

- 1984 『南興史——南洋興発株式会社興亡の記録』東京：南興会。

對馬秀子

- 2005 「八丈島から旧南洋群島・ミクロネシア・北マリアナ諸島への「農場移民」——動態的民族誌」『白山社会学研究』13: 13-27.

- 2006 「離島における第一次産業の実態と課題——八丈島を事例として」『白山人類学』9: 190-212.

中川善之助

- 1941 「戸籍法及び寄留法」『新法學全集 第16卷 戸籍法=寄留法 不動産登記法・借地借家法』末弘嚴太郎（編），東京：日本評論社。

永久保満

- 1973(1937) 『趣味の八丈島誌』千葉：佐々木敦夫（発行者）。

成田龍一

- 2006 「「証言」の時代の歴史学」『記憶が語りはじめる』富山一郎（編），3-32 ページ，東京：東京大学出版会。

南洋興發株式會社

1932 『興發記念——砂糖になるまで』東京：南洋興發.

南洋廳長官々房

1932 『南洋廳施政十年史』東京：南洋廳.

能仲文夫

1941 『南洋と松江春次』東京：時代社.

野間口カリン

1996 「Sugar King ——松江春次の南洋開拓にかけた夢」『恵泉アカデミア』創刊号：82-101.

野村進

1987 『海の果ての祖国』東京：時事通信社.

2005 『日本領サイパン島の一萬日』東京：岩波書店.

増田弘・細谷正宏編

2000 『GHQ 民政局資料占領改革公職追放 II』東京：丸善.

松江春次

1932 『南洋開拓拾年誌』東京：南洋興發.

山田平右エ門

1995 (1992) 『八丈島の戦史』サンケイ自費出版編集センター編集，東京：新日本コミュニケーションズ製作.

吉田裕

2007 『アジア・太平洋戦争』東京：岩波書店.

若槻泰雄

1995 (1991) 『新版戦後引揚げの記録』東京：時事通信社.

[英語]

GHQ 参謀第2部

1998 Chapter VI Overseas Repatriation Movements, 『マッカーサーレポート第2巻』*Reports of General MacArthur Volume I Supplement*, 竹前栄治解説, pp.149-170, 東京：現代史料出版.

Embree, John

1945 *Observations at the Military Government Camps for Civilians on Saipan and Tinian in August, 1945*, 米国公文書館所蔵資料, NN0735006.

資 料

菊池正則（発行者）

1981a 『南海タイムス縮刷版——昭和六～十三年』東京：南海タイムス社.

1981b 『南海タイムス縮刷版——昭和十四～二十五年』東京：南海タイムス社.

戦災援護會

1948 「戦災者（引揚民）援護状況調」東京：八丈島民俗資料館所蔵。
東京府八丈島現業

「自大正十三年至昭和三年度八丈島各村漁業調査統計」東京：八丈島民俗資料館所蔵。